

通信 有座之器

《学校だより》 第2号

令和2年5月18日発行

小田原市立千代中学校

校長 栢本尚之

生徒がいない学校になって、すでに2ヶ月以上が経ちました。今まで、生徒がいない学校の期間は、夏休みでさえ1ヶ月と10日間程度だったのに、このこと一つをとっても史上初のことです。

(そうは言っても、「過去」の学校は夏休み中も部活動等があったので、生徒の姿はほとんど絶えることはありませんでした)しかも、この状態はまだ続くことが決定しました。

このウイソルの影響は学校だけではありません。一部では、人間社会全体が大転換期を迎えてしまったとも言われています。報道では、ビジネスマンの常識の名刺交換がなくなり、人と会うときの作法、何十年も続いてきた慣習までもがなくなったり、縮小されたりした社会になるとも言われているのです。

これからは、学校も前例や習慣にとらわれることなく、常に変革が必須になります。学校は、「前はこうだった」「今まではこうしていた」などという考え方ではなく、今までのものを一旦全て捨て去り、常に新しいものを生み出すという意識で物事に望まなくてはならなくなりました。

いわば、学校の“断捨離”の一種でしょうか。これから創る「現在」の学校が、「未来」に続く学校になるように、今こそ若い人の力や斬新な発想が試されるときだと思えます。

5月の“登校日”風景

まずは消毒ね!

5月11(月)、学校に朝から生徒の声がする。それは3年生の声。昇降口、廊下、階段、もちろん教室にも響いていました。この日は、職員室も朝から何だかそわそわしていました。久しぶりの登校日に、生徒も先生もまるで4月の最初の時のように、一種の気持ちの高まりを感じているようでした。しかし、あくまで登校日。登校する人数も限定して少人数での担任との再会となりました。



3年生の様子

しかし、生徒たちは、たとえマスク越しであっても友達と会うのはかなり久しぶりだったことに加え、直に顔を見て話すことができたことに笑顔がたくさん見られました。それと同時に、常に感染リスクを考える行動をしなくてはならないので、今までの“普通”がどんなに大切であったのかを強く認識させられていたようでした。

教室では、控えめな声しか出せませんが「おはようございます」の挨拶から始まり、担任の先生の「みんな元気でしたか」という問いかけに、多くの子どもたちがうなずいていました。

しかし、この先、学校生活が徐々に再開していき、完全に終日カリキュラムが実施できるようになったとしても、今まであった学校生活と全く同じ生活は戻ってきません。授業スタイルや学校行事のあり方、給食・清掃の考え方や方法、友達との接し方のマナーやルール、部活動、地域との関わり方などの全てのことが、なくなったり大きく変わったりするでしょう。しかし、生徒の力は偉大です。大人たちが考える生徒の姿よりも、きっと逞しく臨機応変に乗り越えていくと信じています。

突然来てしまった『予測困難な時代』



2年生の様子

5月の登校日は、毎週、月曜日が3年生、火曜日が2年生と7組、水曜日が1年生というように、学年が日を変えて登校するようにしました。さらに、同一学年も三分割しての時間差登校で、学校滞在時間も短時間です。詳しくは、各学年だよりや学校ホームページをご参照ください。



1年生の様子

ときどき聞くけど 新学習指導要領って？

かなり大ざっぱに表現すると、“国が決めている学校で教えること(カリキュラム)の基準”です。約10年に一度、時代に見合うように新しくなります。教科書もこれに沿ってつくられています。(文部科学省のホームページには掲載されています)中学校は来年度、その学習指導要領が新しく全面实施となるのです。

私が思う

新学習指導要領が 目ざすもの

今までの学校は、習ったことを使って「今をもっと良く変える」ことができる力の育成を行ってきたと思います。しかし、今回の新型コロナウイルスの一件で強引に気づかされたように、その「今」がこれからは続きそうにありません。

したがって、「新しい今」を創らなくてはならなくなりました。誰も経験していない新しい社会を、手探りで、それも大急ぎで創らなくてはならないのです。

新学習指導要領は、そういう未来が来ることを想定して、そうなったときでも「しなやかに力強く生き抜くこと」ができる人間の基盤を培うことをねらっているのです。

学校だよりの第1号に次のことを書きました。

本校の学校教育目標は、“考える力”と“考える習慣”を育成することを第一に掲げ、「自ら学び、主体的に判断し、行動できる生徒を育てる」としています。つまり、自分事としてちゃんと現実に向き合い、自分の頭で「きちんと考えること」、そして、「他の人と対話をして」、「その先どうなるかを、立ち止まってしっかり想像すること」ができる大人になってほしいと思っています。

「考える力」と「考える習慣」

子どもたちが教科等を学ぶわけは、授業で身につけた物事の「見方や考え方」を、予測困難な未来の社会でより良く活用できるようにするためなのです。

今、先生方は授業をする力を磨いています。例えば、学校が再開したときを想定して授業で効果的に生かせる課題をどうつくるのか、また、みなさんが取り組んでいる課題の達成度にあわせて、今後の授業計画をどうつくるのかなどです。授業づくりも、これまでの常識にとらわれていては、時代に取り残されてしまうと考えているのです。

スクールカウンセラー 毎週、火曜日に来ています

学校の臨時休業が長くなっていますが、登校日に生徒の姿を見られたことで、先生方はかなりホッとしています。

生徒のみなさんには生活アンケートの記入をしてもうもらいましたが、直接カウンセラーに話をしてみたいことがあれば、遠慮なく連絡してください。

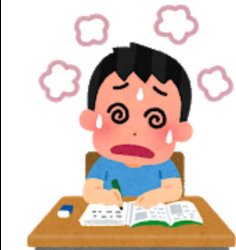
カウンセラーは、毎週火曜日に来ています。詳しくは、学校からのお知らせ(5/11付)やカウンセラー通信をご覧ください。



「高校ないない集？」(自滅編)

5月の連休中に、朝のニュース番組を見ていたら「高校あるある集」という動画が紹介されました。思わずニヤリとさせられたこの動画を見ていたら、自分が高校生だった遠い昔を思い出して、再びニヤリとしてしまいました。真っ先に思い出したのは、定期テストの真っ最中に私がやった“何の生産性もない不可思議な自己満足行為”のことでした。

そのテストは、“数学(全問が記述式問題)”でした。そして、その厄災とも呼べるきっかけは、試験が始まった瞬間に、最大パワーで私に降りかかってきました。時計の秒針が12を指し開始の時刻、数学の記述式問題にもかかわらず、先生の開始の合図の次の瞬間に事件は起こりました。なんと周りのみんなが一斉に答えを書き始めたのです。テスト独特の緊張した雰囲気にも包まれた教室に、響き渡る無数の「カッカッカッカッ…」という鉛筆を走らせる音。私が悠長に『よし問題文を読もう』と思った瞬間に起こった出来事でした。私はすっかり面食らってしまい『みんな、どうして問題文を読まずに答えを書き始められるんだ?』と、もう完全にパニックです。原因は、私がテストに対してかなり高をくくってあまり勉強せず、しかも自分の実力をよくわかっていなかったことにあるのですが、そんなことに気付くはずのない当時の私は、平常心が完全に奪われたままテストを終えてしまいました。



その結果、100点満点中6点(50点満点だと3点)という相当マズイ点数となり、放課後、数学科教官室に呼び出されたのでした。(次号「対策編」に続く)